青年隊OB会報

発行
産業開発青年隊 同窓会

特別号

長澤亮太先生を偲ぶ

ありし日の姿（長澤先生を囲んでの野外講義）『産業開発青年隊二十年史』より

青年隊綱領【誓いの言葉】

一、われらは　産業開発に挺して
　人類平和のためにつくさんことを誓う

一、われらは　友愛と団結をもって
　理想の社会を建設せんことを誓う

一、われらは　不屈の信念をもって
　創設の大業を達成せんことを誓う

産業開発青年隊　隊歌

常にまことを　つらぬきすすみ
祖国のためにと　正しくはげむ
ペンとハンマーの輝くしるし
栄とほまれと希望はもえる
われら若人　若人われら
産業開発青年隊

目　次

長澤亮太先生を偲ぶ会開催にあたって・偲ぶ会式次第 ……1
長澤先生ご経歴紹介 ……2
長澤先生へのメッセージ ……4
熱い思いの若き日(長澤先生の日記より) ……8
鎮魂の儀スナップ ……10
偲ぶ会スナップ・参加者・協賛者名簿 ……12
長澤亮太先生を語る会スナップ ……18
寄稿 ……20
編集後記 ……25

私たち修了生は、短い者で数ヶ月から長い者では四年という期間、ある時は現場であり、また中央訓練所で教育訓練を受けました。

この教育訓練期間中に師と接した時間は非常に少なくむしろ、指導官・教官と接する時間の方がはるかに多くありました。

そんな少ない時間でありながら、威厳のある大きな存在感を誰もが感じておりました。

師は不動明王の如く鬼気迫る迫力で接する面と、厳冬の滝打たれという荒行を行う修行人である姿と、自然の中に和して野点を楽しみ、自然から教えを請う謙虚な姿も持っておられました。

特に日本人の培ってきた文化を非常に大切にされ、教えの中にも多く取り入れられていた事を思いおこします。

自らの人生を産業開発青年隊事業に捧げてこられ、語るべきは全てを語り、知るべきことは全てを伝え、一歩たりともとどまることをせず、一人孤高の頂を目指し突き進んでこられました。

それは師が青年期に抱いた志を実現させんがためであり、天から与えられた時であったのかもしれません。

富士山麓朝霧高原の大地を青年隊の聖地と定め、日夜隊員と寝食を共にし、不毛の大地に果敢と取り組み礎を築き、定住の地として退官するまで当地を離れることはありませんでした。

行政人としては破天荒な生き様であったのかもしれませんが、修了生にとっては、その姿をみるに皆、異口同音「中訓所長」「長澤所長」と呼ばれるように、青年隊中央訓練所と言えば長澤亮太と誰しもが思い浮かべる存在の人でありました。

長澤塾と言うべきか、長澤道場ともいえる青年隊の教育訓練を受け修了した者にとって、その後の人生で必ず思い起こすのは、集団生活と師の姿であります。

師との係わり方は修了生それぞれでありますが、産業開発青年隊事業のまさしく聖地であったこの地で、その一時に足を止め面影と徳業を偲ぶ時間を同志の者と又、私たち修了生を周りから支え支援協力を戴いた関係者の方々と共有したく、ここに集いを設けさせていただきました。

本日は、大変ご多忙の中ここに参集していただきました皆様方に心より感謝を申し上げます。

最後に、当中央訓練所の跡地に新たなる教育訓練機関として、富士教育訓練センターが出来、研修を実施されているにもかかわらず、当会の開催に当たり快く施設を提供していただき準備等諸般のことに就きましてもご協力を賜りましたことに、御礼申し上げます。

平成22年11月20日

長澤亮太先生を偲ぶ会実行委員会

長澤亮太先生を偲ぶ会開催にあたって

長澤亮太先生を偲ぶ会

日　時　平成22年11月20日午後2時より
於　　富士教育訓練センター（静岡県富士宮市）講堂
次　　第
一、開会の言葉　藤原葬祭
一、国歌斉唱
一、黙祷
一、隊歌斉唱
一、先生ご経歴紹介　元建設省建設大学校中央訓練所
訓練科長　吉留一利
一、偲ぶことば
1、実行委員長　産業開発青年隊同窓会会長
光森德雄
2、南米産業開発青年隊協会会長
盆子原国彦
（代読　松永泰然）
3、富士宮ロータリークラブ元会長
佐野義幸
4、九州人会会長　村山茂
5、元建設省建設大学校中央訓練所講師
花輪孝樹
一、祝電披露
一、献花
一、誓いの言葉　指揮　産業開発青年隊同窓会事務局長
菅井文明
一、お礼の言葉　実行副委員会　産業開発青年隊同窓会副会長
伊達徹
一、閉会の言葉　藤原葬祭

長澤亮太先生のご経歴紹介

産業開発青年隊同窓会名誉会員　吉留　一利

産業開発青年隊は、戦後の混乱の時代国土は荒廃し、生活は困窮、貧困の厳しい時代に青年が夢と希望に燃え、生き甲斐を求めて国土建設と青年運動、教育訓練を有機的に連動させて総合化する集団でありました。

創設時においては特に、当時の深刻な青少年問題であった農家の二、三男問題を対象に青年が自主的に、愛国心と国土愛の精神をもって、荒廃した国土の復興建設等に挑み、その中から青年自身の自立を目指す運動となったのであります。

国土建設と技術者養成は、働きつつ学び、集団生活により心技体の鍛錬、向上に努力し産業開発に挺して、人類平和の為に尽くす、友愛と団結を持って理想の社会を建設し、それを達成すべく不屈の信念を持って創設の大業の成就を目指し、基本理念の基に日夜教育訓練に精励努力したのであります。

その産業開発青年隊の創設には、各都道府県、建設省、農林省が国策事業として、農家の二、三男対策として働き乍ら学ぶ青年の集団として組織されました。

長澤先生は、大学卒業後厚生省に奉職、人口問題研究所に勤務され、昭和25年山形県に出向された折、農村青年の実態について直に見聞する機会があり、農家の二、三男が前途を悲観した現実を見て、将来の夢、青年の未来に何を与えるべきか、その青年の求めているのは何かを模索され、その対応策に己の人生を賭けられたのであります。

長澤先生は、昭和28年建設省に出向され、計画局総合計画開発課において、国土総合開発に参画されると共に、産業開発青年隊構想の実現に日夜努力され、当時の人口問題と国土開発技術者の育成、技術者の海外移住等一体化した、教育訓練を目指して青年隊訓練の組織化に精励されました。

地方におきましては、山形県、宮崎県が昭和26年に県独自の青年隊を組織化して、実施運営する運びとなりました。

昭和28年建設省が「国土総合開発の為の産業開発青年隊導入要綱」決定。

地方隊の特別技能訓練を、測量科は地理調査所、建設機械科は土木研究所沼津支所で実施し、昭和30年度より各地方建設局に於いて実施して、昭和37年度より地方建設局の青年隊を統合し、建設研修所に中央訓練所を附置し教育訓練を行ったのであります。

昭和38年度には、霊峰富士の麓、朝霧高原に訓練所を建設しました。

昭和30年度より青年技術移民としての、ブラジル移住幹部要員の特別訓練の一環として行い、昭和31年青年隊の第一次17名がブラジルに移住。「1956年6月9日にサントス到着」。

青年の未来に人生を賭けた先生

（産業開発青年隊移住手続き未完成のまま入国、コチア青年移住の枠内で移住手続きを行い入国しました。）

長澤先生は、建設事務官として出張され、6月1日には、当時のブラジル駐在大使であった君塚愼氏、ブラジル事業家、和田周一郎氏、コチア産業組合専務理事、下元健吉氏、コチア産業組合総務部移民課長、山中弘氏の立ち合いによって、南米青年隊訓練用地の無償譲渡を三者立ち合いの下に覚え書を交換され、南米青年隊の訓練所建設の運びとなった。（パラナ訓練所）昭和39年9月18日にサントス到着「アフリカ丸」の16名が最後となり、その後は個人空路渡泊となり集団移住は無くなりました。

長澤先生は、昭和38年8月1日付けで中央訓練所長として赴任され、青年隊の「メッカ」の長として、退官される迄青年隊の教育訓練と制度の改革、発展拡充に率先垂範、日夜に問わず教育と訓練に精励努力され、それは言語に尽くし難いものがあります。

中央訓練所の教育訓練は、中央隊の一年間の教育から始まり、地方隊の特別訓練の受け入れ、普通科、高等科への制度、建設施工科、建設機械科から測量設計課程、社会開発課程、海洋開発課程、海外課程の設置等一年制度より四年制度迄、時代に合った将来を見越した制度、国内より海外協力まで国策事業に相応しい技術者の育成に、国土開発、災害復旧に実践活動として参画して、ある時は共に汗を流し、青年と寝食を共にしながらの復旧作業には頭が下がる思いと感銘を受けました。

人間性の陶冶、技術の向上、資格の取得等心技体の向上を求め、教育し「富士の如く美しく雄大に尊厳なれ」と青年隊生みの親の一人であり、育ての親である先生の教えと薫陶は、終わる事無く永遠に語り継がれ、今尚脳裏に残り在りし日の姿を夢見ております。

教えと実践実学は、今の時代こそ求められているのではないでしょうか。人類の平和、安全を求め、その為に貢献奉仕する事は言うは易し、行いは難し、然し今の社会こそ先生の教えが、我々に与えられたのではないかと思いますが、今や語るに届かず聞くに答えられない、幽明境を異にしていますが、報恩の意思を持って、微力乍ら社会奉仕を出来る範囲で実践したいと思い、先生を偲ぶ言葉として努力精進する事を誓います。

長澤亮太先生ご経歴

本籍地　福岡県
大正12年5月1日生まれ
昭和24年3月　東京帝国大学文学部社会学科卒業
昭和26年4月　東京大学文学部大学院修了
昭和24年12月　厚生省入省
昭和28年2月　建設省出向
昭和30年5月　建設省計画局総合計画課係長
昭和32年6月　建設省計画局総合計画課長補佐
昭和36年11月　建設省計画局建設振興課長補佐
昭和38年8月　建設省建設研修所中央訓練所長
昭和40年9月　建設省建設大学校中央訓練所長
昭和57年3月　退職
平成5年11月4日　勲四等旭日小綬章　受章
平成21年11月24日　逝去

ありし日の姿（北陸豪雪　総指揮官の長澤先生）

生き様が青年隊になる

光森德雄
産業開発青年隊
同窓会会長
昭和45年度　幹部
隊高等科卒業

本日は「産業開発青年隊同窓会」の「長澤亮太先生を偲ぶ会」に、ご多忙に関わりませず、多数の皆様にご参集いただきました事に先ずもって感謝申し上げます。

本日は時間の関係がありますので、重複を避けるために、私からは本日の開催経緯、同窓会長と云うよりも「私が隊員として感じた事」を中心にいたします。

さて、私が「宮崎県産業開発青年隊」に入隊したのが昭和44年、長澤先生との関わりはその時に始まり、幹部隊に進んで少し深まり、私の修了後、先生が退官されてから密度の濃いものとなった気がします。

県隊当時は「所長講話」を派遣期間中の月曜日に受けましたが、高校を出たばかりで研修に来ている私には、「青年隊」そのものよりも、先生の強烈な印象だけが残り、残念ながらとても先生の講話を理解したとは思えません。

そんな県隊当時の私でしたが、「青年隊、と言うより中央訓練所」に漠然としてはいましたが魅力を感じて幹部隊に応募しました。幹部隊では先生に直接触れる機会が増え、「単なる土木技術者を目指すなら青年隊にいる必要はない、大学や専門学校に進め、此処は青年隊を訓練する場所だ」と言われたのが転機になり、今になって考えるとではありますが、返還されたばかりの「小笠原諸島」への派遣等を通じて「青年隊とは」と云う事に目覚めた時期でもあった気がします。

その影響もあって、幹部隊修了後は当時の「産業開発青年技術協会」に残りましたが、「どうしても海外で仕事をしてみたい」と云う夢を叶えたくて、青年隊との直接的的なつながり、言い換えれば長澤先生との関わりは一時中断しました。

先生との関わりが復活したのは、福岡に移り住んでからの事であり、きっかけは中訓の先輩である杉田俊勝氏、冨重修氏達との出会いがあって、飲みながらの席ではありましたが「九州に青年隊同窓会を作ろう」となり、勢いでその連絡係を引き受けてからのものとなります。

その九州地区の同窓会に長澤先生に来ていただき、特に鯱張ったものではなかったのですが「何故に青年隊を建設省に設置しようと考えたか、南米に技術者移住を考えたか、移住に区切りのついた今青年隊は何を目指すか」等と、所長講話が復活しました。

その講話が「日本人とは、日本人の魂の原点は」等へと拡がり、訓練所は「技術訓練と生き方」のきっかけを作る場であり、「一人一人の生き方が青年隊だ」等と、訓練所では経験する事のできない直伝での講話を受ける事ができました。

それが「青年隊の実践を検証しよう」と云う事になり、最初は九州地区在住者との限定交流でしたが、「ブラジルや東南アジアで活躍、反対に苦労している青年隊を訪ねよう」と更に拡がって、私もカバン持ち的に同行いたしました。

そうした先生との旅が、先生だけでなく、先生を中心とした皆様とふれ合える機会となり、その経験で得たものが、小なりとは言え、起業する上での源となっている気がしています。

先生は豪放な部分だけが強調されがちですが、「これからは資格の時代になる」と「土木施工管理技士の受験においては短大卒と同等とみなす、測量士は修了後2年の実務経験で可」等を法律上で位置付けをされ、「海に囲まれている我が国には、海洋開発が活路になる」と海洋工学過程を、「資源の乏しい我が国には、開発途上国とのパートナーシップが必要」と海外課程を増設されています。

また、「山野の荒廃は国土の荒廃、森林青年隊を結成すべきだ」と提唱され、村山集落で後継者不足によって一旦は途絶えた「伝統歌舞伎の復活」に尽力もされました。

この様に羅列してみると、先生が考えられた事は「資格化時代の到来、海洋資源の開発、開発途上国への支援協力或いは国際貢献、環境保全活動、過疎化対策としての村おこし」とも言い換えられます。

先生の「青年隊組織論」の根幹にあったのは「人は石垣、人は城」的な思いであり、一方では「土木屋でなくエンジニア」のイメージがあり、「バタ臭いバイタリティと知識に裏付けされた尊厳」の多少相反する思いの並立であった気がいたします。

先生を「宗教家」とは思いませんが、「石垣となる人材育成、それが城となる組織作り」のための方法論として、宗教を通じて模索されていたのだろうと思います。

また、同じように「文武

両道」を追求され、「空手、少林寺拳法、剣道、居合道、刀道」の門をくぐられ、「尺八、箏、茶道、華道、能、地方歌舞伎」にも造詣がありました。

この様な先生の模索は、ちょっと見的には「脈絡がありそうで、只単なる思いつき」とも思えますが、それが「先生的には脈路ある人間追求、今風に言えば青年隊探し」だった気がします。

しかし、私達青年隊員に取っては「産業開発青年隊綱領」は人生のバイブルであり、「一(ひとつ)われらは」で始まる七五調のリズム、簡潔でありながら格調の高さは先生の神髄だと思います。また、隊歌を作詞・サトウハチロー、作曲・石桁真礼生の両巨匠に依頼された事、ペンとハンマーをモチーフにした隊旗、長澤先生ならではのセンスと人脈の豊富さが発露された事例だと思います。

また、先生に対しては「産業開発青年隊の創設者、長澤亮太」との声もあり、反対に「それは違う」との声もお聞きします。しかし、私達には、「法律を起案したのは誰、それを採択した当時の大臣は誰、初代所長は誰」と云う様な事は関係ありません、私達は「先生は無比の師であり、先生の教えが青年隊」だと受け止めています。

私達は、青年隊綱領から「土木技術者としての誇りを持って人類平和のために尽くす、そのためには友愛と団結が必要」と云う事を学びました。

先生の期待には未だ未だ遠いのも現状ですが、今後も「自分の生き様が青年隊になる」と噛み締めて、「青年隊らしく生きる事」を追い続けます。

先生への思い、未だ未だ意は尽くせませんが、既に長くなりました。「さようなら」とは申し上げません、「ありがとうございました」の一言を申し上げて結びといたします。

ご恩は一生隊員の胸に

盆子原国彦
(代読)
南米産業開発
青年隊協会会長

長澤先生がお亡くなりになってもうすぐ1年が経ちます。我々南米産業開発青年隊では、今年の4月、イタイプーダムの近くフォス・ド・イグアスーで、多くの隊員列席の元に先生を偲ぶ会を執り行いました。

先生がブラジルに取り憑かれ、当時のコチア産業組合の下元理事長と意気投合し、建設省、農林省、外務省という3省合意の青年隊移住に道を開き、その引き受け団体としてブラジル側では当時沢山あった日系農業組合関係者399人が加入して農拓協の設立総会が開かれ、青年隊移住が開始されたのです。この農拓協はその後の日系農業組合が解散した中で、今も日系唯一の中央会として活躍致しています。

そしてブラジルに移住した326名の青年隊員のうち、約76名の死亡者、日本その他の国に再移住した人が51名、不明が17名、現在182名がブラジルで生活しています。今でもアマゾンの源流近くで水力発電のダム現場で就労している人、大農場を経営している人とか、このブラジルで友愛と団結をもって開発青年隊の名の下に、ブラジルの発展の為に尽くしてきました。これも一重に先生の薫陶の賜と移住隊員一同感謝致しています。

今日先生を偲ぶこの会に出席出来ませんが、幾度もブラジルの地を訪れられた先生の歩かれた所は、移住した青年隊員が住んでいるところで、その都度隊員は励まされました。

本当に有り難うございました。この御恩は一生隊員の胸の内で生き続けています。

最後に今日ご出席の皆様のご健勝を遠くブラジルの地からお祈りして、お別れの言葉とさしていただきます。

タダでは起きなかった

松永泰然
昭和45年度
普通科修了

長澤先生との思い出は尽きぬほどありますけれども、私が24年間在住したブラジル時代の思い出を少しだけお話させていただきます。

忘れられないのは、長澤先生が刀道の先生を連れて来られた。その先生が試し切りをするため、「このくらいの太さの竹を4本用意してください」と長澤先生が私に命じましたので、用意しました。四隅に立てて切るわけです。

初めて見る日本刀で、息を飲むような迫力ではあった。けれども、その後、先

生と釣りに出かけた車の中で、光森会長と私と「あんなものは、ブラジルでは、女の子がファッコンという蛮刀で片手で切るだろう。100万円の刀を使って大げさに切るほどのことか」と話しました。

もちろん長澤先生が乗っておられる。怒られるかと思ったのですが、話はエスカレートして止まらない。「何が刀道だ。どうせならファッコン道を立ち上げたらどうだ。ねえ、光森さん」と言ったら、やおらむっくりと先生が体を起こして「うん、ファッコン道か、面白いな」。

その滞在中にファッコンを使って武芸者のような型を作った。それをお披露目して「ファッコン道の旗上げとする」と言って意気揚々と帰られた。転んでもタダでは起きないのです。

もう一つ。先生は当然乗馬が得意だろうと思っていた。先輩の農場に泊まった時、朝一番で「馬を用意して置きました」。先生は何か浮かぬ顔をしている。「オレはいいよ」「いえ、どうぞどうぞ。大人しい馬ですから乗ってください」。乗り方が怪しい。乗ったとたん、どんと落ちて、馬がびっくりし、前足で先生のももを踏んでしまったのです。かなりのケガをしました。先生は馬に乗れなかったんです。

その後、富士宮に帰られてからが真骨頂です。流鏑馬と言う馬に乗って弓を番えて射る伝統武道がありますが、「松永。お前があの日馬に乗せたんで流鏑馬を始めたんだ」。ここが先生のすごいところだな。

総合的にこの人は人たらしだと思う。気が付いたら、この先生の言う通りになってしまう。おだてられておだてられて、最後にひどい目に会った方がいっぱいいると思うのです（笑い）。私もその一人でした。でも憎めない先生の魅力というものが、今も私の中で生き続けている。

最も悲しかったのは、先生が突然いなくなった時のことです。先生の家に行くと、家具も何もそのままで先生だけ消えていたんです。「欲しいものがあったら何でも持って行けよ」と言われましたが、悲しくて悲しくて心にぽっかり穴が開いたようで、何も持ち出すことが出来ませんでした。私は玄関に掛かっていた編み笠を一つもらってきた。これを遺品だと思いました。今も私のお寺の玄関にその編み笠が掛かっています。修行に行く時、私はその編み笠をかぶって外に出ます。

畏怖とはああいうこと

佐野義幸
富士宮ロータリークラブ元会長

先生は、吉田松陰の「草莽崛起」ということをいつも口にしていました。東京帝国大学を出ているのに、草の根を分けて人材を探せと言っていました。先生が言うとミスマッチだなと思いましたけれども、その思いは話しているうちに分かりました。「人材というのは学歴ではない。やはり草の根を分けて出てきた人たちが崛起して、初めて日本という国はよくなるのだ」。

たいへんな熱弁でした。私は先生からいろいろな教えを受けました。

けれども私もへそ曲がりなところがあるものですから、酒を飲むと遠慮しないでものを言いましたので、時々先生は「貴様、そこへ直れ」と言って日本刀を持ってきたことがありました。

しかし、へそ曲がりのところを買ってもらったのかもしれません。よく「飲みに来い」ということで、先生の所にお邪魔しました。一番感心するのは、人をちゃんと見てくれるところでした。だから、話をしているうちに、私のほうも引き込まれていくんですよ。

あれは晩秋の頃でした。「ちょっと車に乗れ」。どこへ行くのというと、富士山へ行く。「こんな夜中に富士山へ行くんですか」「君に聴かせたいものがある。付いて行きましたら、五合目当たりの大きな岩に腰掛けて尺八を聞かせてくれたのです。

先生は「私は尺八を吹くだけではないんだ。風を聴きに来るんだよ」。私には意味が分かりませんでしたが、ずっと先生と一緒にいると、何かいろいろなもの、見えないものが見えてくるような感じで、しばらく岩の上にいました。先生の後ろにはすごいものがあるんだと感じました。畏怖というのはああいうことだなあと思いました。

先生は「ブラジルに第二の日本を作るんだ」と言う。「第二の満州を作るわけではないんでしょう」「当然だ」。我々が吹っ飛ぶような大きな声で「そんなことを考えているわけがないだろう。平和主義の基づいた国際コミュニティを作ること。できれば経済優先の日

高潔な志と実行力

村山　茂
九州人会会長

3時間くらい話をしたいのですが、一言だけ。長澤先生に奉って、九州人会を代表してごあいさつを申し上げます。

先生を偲ぶということは、先生の志を認知・認識するということではないかと思います。

九州人会の会長をやってくれという拝命をいただきまして、先生と多々話をする機会がありました。その中で最も感銘を受けたのは、その日本に対する志の高さ本世相を作り上げていた官僚たちに釘を刺したいんだ…」。つばが飛んでくるような感じでした。

「建設大学校という学校を通じて、生徒と一緒に世界に目を転じながら、しかも地域の教育・文化に対して絶対に目を向けていくんだ。それが我々の生き方なんだ」。先生はこういう風に言われました。

ロータリーのメンバーも同じ思いで、世界に目を転じながら、やることは地道に、地域に根差した活動をしていく。そういうことで現在進んでいます。長澤先生の教えをよく実践していただきたいように思います。亡くなったことをまったく知りませんでした。お話を聞いて、驚くやらなにやら。あれだけ喧嘩をした人がこの世からいなくなってしまうのは、本当にさみしいものです。

であります。全世界に広がっている同窓の方々が、国を思う一念のその誠の心を引継いで、志をこの世界中に展開する。特にグローバリズムの中で、本当のナショナリズムという観点から日本精神を同化し、掘り起こして今後の国家運営のために役立てていただきたいと思います。

国を運営するのは、われわれ個人個人ではないか。これが主権在民の基本でありますから、どうか同窓の皆さん、われわれ九州人会もそうでございますが、先生の高潔な志と実行力を引き継いで、草葉の陰でお喜びになられるよう、決してやったらどうか。どうもありがとうございます。

天国で新しい青年隊を

花輪孝樹
元建設省建設大学校中央訓練所講師

ちょうど28歳の頃、35年くらい前になりますでしょうか。長澤先生と最初の出会いを持たせていただきました。建設大学校の当時の校長先生から「東京のふんだんな情報を、この山の中に行って若い隊員諸君に話してくれないか」というのがきっかけでした。

ある時、長澤先生に「私のような青二才の若造の言うことをなぜ聞いてくれるのか」と聞きました。間を入れずに次のようなことを話してくださった。

若い頃、鹿島建設の鹿島守之助社長にお願い事に行った。鹿島社長は28歳の長澤先生に非常に丁寧に接してくれ、言うこともよく聞いてくれて「あなたのような考えをよく国土開発に結びつけた。素晴らしいことだ」と話されたそうです。長澤先生は、それにすごく感激されたそうです。

青年隊活動は決して安定していたわけではありませんでした。長澤先生が退官する間近のことでしょうか。行政改革で青年隊活動を廃止するという方針のようでした。無い知恵を絞り、社団法人産業開発青年技術協会を発展的に解消して財団にしたらどうか、ということになりました。その発起人に私はさせられて、いろいろな人に話を持っていきました。

その前段階がありまして、先生がちょうど退官された。退職金があるわけです。私は先生のご家族のことなども考えながら辛い思いで「退職金を投げ出してもらえませんか。そうすればそこそこのお金が集まると思います」とお話しました。先生は「分かった、そうしよう」。二つ返事で本当に銀行口座に振り込んでくれました。

長澤先生にとっては、自分が食うだけの青年隊活動、あるいは仕事としての青年隊活動ではなく、自分の長澤イズムとして青年隊活動だったんだな、と私はあらためて感激をしました。

皆さんにこうした一面があったことを知っていただいて、長澤先生をさらに好きになっていただけたらと思います。最後に長澤先生に申し上げたい。お亡くなりになって1年。もうぼつぼつ天国で新しい青年隊を作ってもらいたいと思います。ありがとうございました。